

誤った鑑定

小酒井不木

青空文庫

晩秋のある夜、例の如く私が法医学者ブライアン氏を、ブロンクスの氏の邸宅に訪ねると、氏は新刊のある探偵小説雑誌を読んでいた。

「探偵小説家というものは随分ひどい出鱈目でたらめを書くものですね」と、氏は私の顔を見るなり、いきなりこういつて話しかけた。

「え？ 何のことですか？」と私は頗るすこぶ面喰めんくらつて訊ね返した。

「今、ジョージ・イングランドの『血液第二種』という探偵小説を読んだ所です。その中に出て来る医者が、血液による父子の鑑別法を物語っていますが、実に突飛とつび極まることを言っていますよ、まあよく御聞きなさい。こうです。父と子の血液を一滴ずつ取つて、それを振動器の中へ入れて、ませ合せると、もし真実の父子ならば、血液を満している微小な帯電物の振動が一致するというのです。電子ではあるまいし、何と奇抜な説ではありませんか？」

私もそれを聞いて思わず吹き出してしまった。

「それじゃまるで支那の大昔の鑑別法そっくりですね」と私は言った。

「それはどんな鑑別法ですか？」と氏は急に真面目な顔をして訊ねた。

「支那の古い法医学書に『洗冤録』せんえんろく』というのがあります。その中に、血液による親子の鑑別法が書かれています。それによりますと、親と子の真偽を鑑別するには、互に血を出し合つて、それを、ある器の中にたらすと、もし親子であつたならば、その血がかたまつて一つになり、もし親子でなかつたならば、よく混らないのです」

「そうですか、いや却つてその方がむしろ科学的鑑別法に近いじゃありませんか、現今では、血球の凝集現象の有無から判断するのですもの」こう言つて氏は更に雑誌を取り上げて上機嫌で語り続けた。

「それから、その医者はまた言います。人間の血液は四種類に分けられていて、親と子は同一種類に属するものだ。四種類に分けられているとまでは正しいですけど、親と子が同一種類だということは、少し考えたら、言えないことではありませんか。父と母とが同一種類の人ならばともかく、父と母とがもし違つた種類の人だつたならば、生れた子が親と同一種類だとはいえなくなるのが当然ですからね」

「何しろ、探偵小説家は自分で血液などを實際に取り扱つたことがなく、ただ書物などに書かれてあることを、自分勝手に判断して書くのですから、そうした間違いを生ずるのでしよう」と私は言つた。

「それはそうですね。小説家の書くことを一々穿鑿せんさくするのは、穿鑿する方が野暮かもしれません。たしか一八七〇年頃だつたと思います。フランスで、ある若い女が、豚などに生えているあの針のように硬い針毛ブリスルというのを細かく刻んで、それを自分の憎む敵の食事の中へ混ぜて殺した事件があつて、一時歐洲で大評判となりました。すると小説家のジームス・ペインが、この話を材料にして『ハルヴス』という有名な小説を書き、その中の主要人物の一人を、その姪が、馬の毛を細かく刻んで食事の中へまぜて殺すことに仕組みました。その実、馬の毛では所要の目的は達せられないのです。即ち針毛の細片ならば消化管に潰瘍を作つて死因となることが出来ませんが、馬の毛は却つて消化液の作用を受け、潰瘍を作ることが出来ません。つまりペインは豚の毛で人が殺せるならば、馬の毛でも殺せるだろうと自分勝手に想像したものですから、そういう誤謬をしたのです」

「そうですね。いや、よく考えて見ますと、小説家ばかりではなく、専門家である医師ですら、そういう誤りを仕勝しがちだろうと思ひます。只今御話しのジョージ・イングランドの探偵小説でも、医師が勝手なヨタを飛ばすところを、わざと書いたものとする、かえつて作者の皮肉だと受取れぬこともありませぬですね」と私は言った。

「如何にも御尤もです、昔から医者いしやは小説家に皮肉をいわれづめですから。遠くはアリス

トフアネスから、モリエール、シヨウなど、随分ひどく、医者が悪口を言っています」とブライアン氏も益々興に乗って来た。

「実際に於ても、医師は随分間違つた考を持っています。先年、日本でも、ある開業医が、自絞と他絞の区別だといつて、いい加減なことを発表し、それを基礎に、ある事件の鑑定を行い、大学の法医学教授の鑑定を覆えたようなことがありました」

「ほう、それはどういうことですか？」とブライアン氏はすかさず訊ねた。

「おや、今日はあべこべに私が話をさせられますね。それは、ある窒息死体鑑定事件でして、周囲の事情からして、死体は絞殺されたものと推定されました。そこで、ある大学の法医学教授が自絞か他絞かの鑑定を命ぜられました所、教授はその区別は明かでないという鑑定を下しました。ところが、事件が長引いて、ある市井しせいの開業医が再鑑定を命ぜられましたら、その開業医は、自絞に間違いないと断定したのです。その鑑定の根拠として、その人は次のような事項をあげました。第一に、自絞即ち自分で自分の頸くびをしめる場合には、絞める力が弱く、且つ吸息後に決行するから、死体の胸部を強く圧迫すると呼気を出すが、他絞即ち他人に頸をしめられる場合には、絞める力が強く、且つ呼息時に行われるから死体の胸部を圧迫しても呼気を出さない。第二に、自絞の場合には、吸息時に行われ

るから、肺臓の鬱血が劇烈ではないが、他絞の場合には呼息時に行われるから、肺臓の鬱血が劇烈で、丁度肺水腫のような外観を呈しているというのです。実に、念の入った暴論ではありませぬか？」

「いや全く探偵小説家のヨタ以上ですね」と察しのよいブライアン氏は言った。「一寸考えて見ると、いかにももつともらしいですが、生理学書の一頁でも見た人には、そういう結論は下されませぬね」

「本当にそうです。肺臓内の血液量は吸息時に最多量で、呼息時には少くなるのですから、呼息時に行われると称する他絞の際に、肺臓の鬱血が劇烈である筈はありません。これだけでも既に自家撞着に陥っています」

「吸息時には肺が拡がるから、血液が追い出されるとでも考えたのでしょうか」

「そうかもしれない。それはとにかく、自絞が吸息状態で行われ、他絞が呼息状態で行われるという説も、随分独断的ではありませんか？」と私は言った。

「困ったものですね。世の中には自分の経験が絶対に正しいと信じている人がありますが、その人などもそういう頑固な人の部類に属しているでしょう。つまり、自絞が呼息状態でも起り、他絞が吸息状態でも起り得るということを考える余裕さえないのでしょう。よく

何年、何十年の経験とか言つて、世間の人から尊とうとがられますが、経験だとして間違まちがいがないとは限りませんよ」

「それにしても、そういう人の鑑定で裁判された日には、たださえ誤謬ごごの多い裁判が、誤謬ごごをなからしめようとする目的の科学的鑑定のために、却つて毒されることになりますね。恐らくあなたは、そういう例に度々御逢いになったことと思いますが、如何ですか？」と、私は、ブライアン氏に何か話してもらおうと思つて、ひそかに氏の顔色をうかがつた。

「ないこともありません」と氏はニコリ笑つて言つた。「中には随分滅茶々な鑑定をする医師があります。今晚はだいぶあなたに話してもらいましたから、これから私の関係した事件の御話を致しましょう」

「これは数年前、ニユーヨーク紐育ニユーヨークから程遠からぬ田舎で起つた事件です」とブライアン氏は言つた。

その地方の豪農に、ミルトン・ソムマースという老人があつた。よほど以前に、夫人に死に別れてから、一人息子のハリーと共に暮していたが、事件の当時ハリーは二十二歳で、丁度、農学校を卒業したばかりであつた。母のない家庭であつたため、父子は非常に親密

であつて、家政一切は、ミセス・ホーキンスという老婆が司り、近所には、ソムマース所有の田地に働く小作たちの家族が群がり住つていた。

ソムマースの家から一哩ばかり隔たつたところのスコットという農家に、エドナという娘があつた。彼女は、鄙ひなに似合わぬ美人で、色白のふっくりとした愛らしい顔と、大きな碧あおい眼と、やさしい口元とは、見るものを魅せずには置かなかつた。ところが、彼女は非常な山だしの御転婆で、夏はいつも跣足はだしで歩きまわり、年が年中、髪を結つたことがなく、房々とした金髪は、波を打つて肩の上に垂れかかり、頸や腕は、かなり日に焼けていた。ハリーはいつしか、この娘と恋に落ちたのである。

彼はしかし、そのことを父に告げる勇氣がなかつた。父は由緒ある家系を誇る昔かたぎし氣質の人間であるばかりでなく、娘の家を常々卑しんでいて、ことにエドナの性質を見抜いて、「鬼女」という綽名あだなをつけた程であるから、到底二人の結婚を承諾してくれまいと思つたからである。ところが、二人の恋は段々募りつの、結婚してしまつたら、父も文句は言うまいと考え、ハリーはひそかにエドナを紐育へ連れて行つて結婚した。これを聞いた父は大に怒つて、どうしても二人を我が家へ寄せつけなかつたので、二人は致し方なく、程遠からぬ所に他人の用地を借り受けて自活することにした。

一しよに暮して見ると、ハリーは嫁の性質が父のつけた綽名にふさわしいことを知った。彼女は手におえぬじゃじゃ馬で、ほとほと持てあますことがしばしばあった。しかし、彼かれこれ此するうちに二人の間に女の子が出来、それからというものは、彼女は非常におとなしくなつた。

するとその頃父のミルトン・ソムマースは、老齡のためか、又は寂しさのためか、にわかに健康が衰え出して来て、遂には二六時中床の上に横わらねばならぬくらいになつた。そこで彼もとうとう我を折つて、ハリーとその家族を呼びにやつて同居させ、ハリーに田地の監督をさせ、エドナに家政を司らせることにした。

老人の病氣は段々悪くなるばかりであつて、とうとう家族のものでは看護がしきれぬといふので、ニューヨークから看護婦を雇うことにした。看護婦はコーラ・ワードといつて頗る美人であつたが、いつの間にかハリーに心を寄せ、ハリーも満まんざら更厭でない様子であつた。しかしこの様子を見たエドナは、急に本来の險悪な性質を發揮して、はげしい喧嘩こそしなかつたが、非常に看護婦をうらんで、早く解雇してくれとハリーに迫つた。

家政婦のホーキンスはエドナが来てから、食事に関する仕事はエドナに奪われ、掃除だとか、洗濯だとか、卑しい仕事ばかりさせられるようになったので、自然エドナを快く思

わなくなつた。

ソムマース家に、こうした不快な空気が漂つていたある日の午後、エドナは夕食の支度のために牛乳を搾しぼりに牛小舎へ行き、家に帰つてその牛乳を、竈かまどの上にかけてあつたフライ鍋の中へ入れた。彼女はそれで、肉へかける汁を作るつもりであつたが、何思つたかそれを中止して再びその牛乳を罐の中へあけ戻し、冷すために皿場へ置いた。

その夕方、病人は発熱して、頻しきりに渴かつを訴えたので、看護婦が牛乳を取りに台所へ行く、都合よく皿場の上に牛乳の入つた罐があつたので、そのまま病室へ持つて行つて、病人にのませた。ところが、牛乳を罐からあけてしまうと、彼女は、ふと罐の底に、緑色をした残渣ざんざのあるに氣附いた。彼女はびっくりして、もしや、それがパリス・グリーン Paris Green (植物の害虫を除くための砒素含有の粉末)ではないかと思ひ、ハリーとエドナの居た室に来て、それを見せ、パリス・グリーンではないかと訊ねた。ハリーは、そうらしいと言つたがエドナは黙つていた。

看護婦の頼みによつて早速、かかりつけの医師が呼ばれたが、医師もその緑色のものを見て、パリス・グリーンであろうと言つた。果して、それから間もなく、病人の容体は急に悪くなり、遂に夜明け方に死んだが、医師は砒素中毒による死亡であると診断した。

「こういう事情ですから、警察から、検屍官が派遣されることになりました」と、ブライアン氏は言った。「そして、間もなく、その地方の開業医で、警察医を兼ねていたスチュワートという人が死体解剖を命ぜられました。解剖の結果、死体の胃の内容物に、多量の砒素化合物があるとわかったので、事件は裁判所に廻され、予審判事が出張して、ソムマース家を委しく取調べることになりました」

予審判事の一行は、家人を一々訊問し、家の隅々を搜索した結果、牛小舎の装具置場の高い棚に、パリス・グリーンの入ったボール箱を見つけた。その箱は破りあけられて、内容が少しばかり取り出され、粉末の一部分は地面へこぼれていた。しかもその箱のあけられたのは、つい近頃であるとわかった。その時分はもう収穫時もとくの昔に過ぎ、春以来、パリス・グリーンを使用する必要はなくなっていた。それ故、使用された粉末は、当然牛乳罐の中へ入れられたものに違いないと結論された。

附近に住む小作共は、もとよりパリス・グリーンが、牛小舎にあることを知っている訳もなく、また牛小舎へ自由に入出入りすることを許されてもいなかっただから、嫌疑は当然家内のものかかった。しかし家内のもものうち、何人が殺人を敢て行う程の強い動機を持っていてであろうか？ 幸に毒の入れてあったボール箱の上には塵埃が溜っていて、指

紋がはつきり附いていたから、直ちに写真に撮影され、それと家内の人々の指紋をとつて比較して見ることになった。ところが意外にも、若夫婦の指紋と、看護婦の指紋との都合三種がボール箱についていたのである。しかし、三人が共謀して行つたこととは考えられぬから、三人のうちの誰かに違いないと推定して、三人にはボール箱の指紋のことを告げないで、別々に色々訊問して見たが、少しも要領を得なかつた。

故人は徳の高い人であつたから、人々は切に哀悼の意を表し、その忌わしい事情は、附近一帯の噂の種となり、人々は勝手に色々の説を建てた。若夫婦の結婚の際に於ける若夫婦と父親との衝突、看護婦とハリーとエドナの三角関係などからして、色々な解釈が試みられた。あるものはハリーが結婚以来父親を恨んでいたから、その為に父を毒殺したのであろうと想像し、あるものは故人が金持ちであつたから、看護婦が後継者の嫁になるために、老人を殺してエドナに嫌疑をかけるよう仕組んだ行為であると想像し、またあるものは、エドナがかねて舅を恨んでいたがためだと想像した。が、予審裁判の結果、ミルトン・ソムマースは砒素剤によつて毒殺され、犯人はエドナであると決定されたのである。

世評はエドナに取つて極めて不利益であつた。人々は彼女が虚栄心を満すために、早く老人を亡きものにして財産を良人のものとしようとして行つた仕業であると解釈した。且、かつ

彼女はそのとき妊娠中であつたが、獄中で子を生んでは、生れた子に焼印を捺おすようなものであるから、それやこれやで彼女は少なからず煩悶した。

「このソムマース若夫人の弁護士から、私に事件鑑定の依頼があつたのです」と、ブライアン氏は語り続けた。「弁護士は、夫人の無罪を信じ、老人の死体の医学的検査に、根本的の誤謬があるにちがいないと見たのです。私も一いち伍ぶ一いち什じゅうをきいて、出発点はやはり胃の内容物の化学的検査にあると思ひました。もしパリス・グリーンが牛乳に混ぜられてから熱せられたならば、表面に緑色の泡が立たねばなりません。ですから、誰の眼にもつき易いので、そんな危険なことをする者はない筈です。そこに何か搜索上の手落ちがあるだろうと思つて、鑑定を引き受け、胃の内容物の再鑑定を願ひ出て、許可されたら、なお念のために、専門の化学者二人のところへ、別々に分析を依頼するよう、手筈をきめました」

弁護士の要求はきき入れられ、胃の内容物はブライアン氏の手許に届けられた。氏は早速、砒素鏡検出法を始め、その他の方法によつて分析に取りかかったが、大量は愚か、砒素の痕跡さえも発見されなかつた。

「いや、実に、その時は驚きましたよ」と氏は言葉を強めて言った。「何しろ警察医は多量の砒素が含まれていたと証言したのですからね。又主治医も主治医です。砒素を嚥のんで

もないのに、砒素中毒で死んだと診断したのですから。二人の化学者の分析の結果も同様でして、法廷でその証言が述べられると、傍聴人の感情は急転して、夫人に対する同情に変わってしまいました。陪審官はたった二十分間で決議して、ソムマース夫人の無罪を宣告しましたよ」

こうして、医師の誤まった鑑定のため、無^む辜^この人が危うく殺人罪に問われようとしたのである。

×

×

×

「それにしてもどうしてその緑色の物質が牛乳罐の中に入っていたのでしょうか？」と、私は、ブライアン氏が語り終つてから、暫らくして訊ねた。

「それが即ち第二の問題ですよ。私はただ砒素中毒かどうかを鑑定すればよかつたのですからそれ以上、搜索も致しませぬでしたが、これが、あなたの好きなオルチー夫人の探偵小説に出て来る『隅の老人』であつたなら、すべからく、解説なかるべからずですね。はははは」と氏は愉快げに笑つた。

「無論そのパリス・グリーンは牛乳をあげたあとで罐の中へ入れたのでしようから、そこに最も肝要な問題がある訳ですね？」と私は、氏の解釈をきこうと思つて訊ねた。

「そうですそうです。嫌疑は当然その看護婦にかからねばなりません。『隅の老人』ならば、主治医と看護婦とを共犯にするかもしれないよ。何しろ看護婦の指紋が、パリス・グリーングリーンの箱に発見されたというのですから」

「どうもこの事件には不可解な点が多いようです」と私は言った。「看護婦ばかりでなく、ソムマース夫妻の指紋も、ボール箱についていたというのですからね。この事件の蔭には恐らく複雑した事情が潜んでおりましょう」

「無論そうです。ですが、それは探偵小説家に考えて貰うことにしましょう。ソムマース夫婦は今では楽しい家庭を作つて、平和に暮しているそうです。問題の看護婦は、何でもその後ニューヨークの生活が厭いやになつて、田舎へ引き籠こもつたとかききました。しかし一ばん貧乏籤くじをひいたのは、警察医のスチュワート氏でした。誤まちまつた鑑定をしたために、その後すっかり評判が悪くなつて、門前雀羅じゃくらを張るようになったそうです。いやだ**いぶ**表あらわて通りも静かになつて来ました。これから、あつあついコーヒーでも一杯のみましようか……」

(初出不明)

青空文庫情報

底本：「探偵クラブ 人工心臓」国書刊行会

1994（平成6）年9月20日初版第1刷発行

底本の親本：「趣味の探偵団」黎明社

1925（大正14）年11月28日初版発行

入力：川山隆

校正：門田裕志

2007年8月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

誤った鑑定

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>